



美貌の影

長編サスペンス

笹沢左保



BIG BOOKS



美貌の影

定価720円

著 者 笹沢左保

発行者 土井 勇

発行所 株式会社 青樹社

〒101 東京都千代田区 三崎町2-6-7

電話 東京 (03) 264-6902・264-6904

振替 東京 (1) 47648

落丁・乱丁本はお取り替え致します

ISBN4-7913-0313-X

長編サスペンス

美貌の影

笹沢左保

BIG BOOKS



A71542

青樹社

目次

第一章

五

第二章

三

第三章

一〇

第四章

二〇

第五章

二七

第一章

1

五時を告げるベルが鳴ると、あちこちで吐息が洩れた。それから、いっせいに椅子を動かす音がする。甲高い声で、言葉を交わす者もいる。

岸田美沙子も、手早く事務机の上を整理した。手を動かしながら、窓の外へ目をやる。銀杏の樹の枝越しに見えている三棟の工場の窓には、もう灯が点っていた。

三星食品は、インスタント・ラーメンがやや下火になると、新しく清涼飲料水売り出して、昨年話題をまいた会社である。夏場に向かって、清涼飲料水の需要は増すばかりだった。

事務系統は定刻の五時で終業になるが、三棟の工場では今夜もまた残業が続けられるらしい。

「何をぼんやりしているの？」

隣りの香山由紀江が、声をかけてきた。その目は、ひやかすように笑っている。

「別に……」

ひやかしにはもう馴れ切っているはずなのに、岸田美沙子はやはり照れたように目を伏せないでいられた。なかった。

「今日もまた、彼とは別行動ね」

と、香山由紀江は工場の方を顎でしゃくって見せた。

「毎度のことだから、気にもならないわよ」

強がりではなく、美沙子は言った。彼とは、二号工場の現業主任をしている長谷川光彦のことだった。このところ、工場の残業が続いている。八時ごろにならなければ長谷川光彦は帰れなかった。一カ月ほど前から、美沙子は長谷川光彦と肩を並べて、会社の門を出て行く時の開放感を味わえなくなっていた。

「でも、あと二週間なんだから、そういつもベタベタくっついていないこともないわね」

少々男っぽいところのある香山由紀江は、はつき

りしたものの言い方をした。

「そうね」

美沙子も、軽く受け流しておいた。

二週間後の五月二十日に、美沙子は長谷川光彦と結婚することになっている。挙式の段取りはもちろん、美沙子の嫁入り支度もすっかり整っていた。新居は長谷川光彦のアパートだったが、そこもすでに新婚生活に相應ふさわしいように片付けられている。

「おい、杉田の話知っているか？」

男の同僚が、そう言いながら美沙子の傍を通り過ぎて行った。

「杉田が、どうかしたのか」

遠くの席で、誰かがそう応じた。

「あいつ、警察に捕まったんだそうだ」

「本当か！」

「昨日の夜酔っ払い運転で轢き逃げしたんだ。それで今日、あいつは会社を無断欠勤さ」

この同僚に関する新しい情報に誰もが帰り支度をやめてしまった。たちまち人垣が作られて、緊張と好奇心が半々の顔が、事務室の中央へ次々に集まっ

て来た。

人垣に加わらなかったのは、岸田美沙子だけだった。彼女はロッカーのところへ行き、事務服をスーツの上着と着替えた。再び席へ戻って、ヒールをネルの小布で簡単に磨いた。

背後の人垣には、関心がなかった。杉田という同僚が警察に捕まったというニュースも、美沙子にはニュースでなかった。まったくの他人事なのである。

二週間後に結婚する。結婚すれば、会社を辞めなければならぬ。二週間後には、杉田という同僚も同僚ではなくなるのだ。

自分にまったく関係のないことには、興味を示さない。これは女にはありがちなことだった。特に、みずからが満ち足りている時はなおさらである。如何なる危険や災難が待ち受けているか、人間には分からない。だが、幸福の絶頂にある時は、自分には何も起こるはずがないという妙な自信を持っているのだ。

現在の美沙子の場合が、そうであった。彼女の道は、目の前に真っ直ぐ伸びている。そこを歩いて行

きさえすればいいのだ。わき見をする必要はない。

美沙子は、バッグを手にして立ち上がった。人垣はまだ崩れていなかった。誰も、美沙子を振り返ろうとはしなかった。

「お先に……」

と、美沙子は香山由紀江だけに小さな声で挨拶をした。香山由紀江は振り向いてほんの一瞬笑って見せたが、すぐまた人垣に首を突っ込んでしまった。

それでも、別に不満ではなかった。美沙子はそのまま、事務室のドアへ向かった。彼女が廊下へ出てからも、同僚たちが散る気配はなかった。美沙子は、一人で廊下を歩き、階段を降りた。

都心にある一流会社とは違って小さな事務所であった。木造建てで、三階が社長室と会議室、それに応接室になっている。

二階は総務と会計、一階が営業と運送の各課によって占められている。これが、三星食品の事務関係のすべてだった。

事務所を出ると、目の前はかなり広い空地になっている。左手に倉庫があり、車庫には数台のトラッ

クが納まっていた。右手に、三棟の工場が並んでいる。工場だけは、他の食品会社に勝るとも劣らない規模で、近代設備を備えていた。

三星食品は、世田谷区給田町にある。美沙子の家は、中野区の江古田だった。京王線で新宿へ出て、そこでまた西武線に乗り換えなければならない。あまり近い通勤距離とは言えなかった。家に着く頃には、あたりも暗くなっているはずだった。

京王線に乗る。この時間の上りは逆コースで、電車はあまり混んでいない。二つばかり駅をすぎたところで、美沙子は坐ることができた。

電車の震動に、身を任せる。すっかり落着いている美沙子だった。じっとしてられないような幸福感とは違う。ほのぼのとした温かみが、胸のうちに宿っているのだ。

六年間通勤しているコースだったが、電車の中でこんな余裕のある気持ちでいられるのは、長谷川光彦との結婚が決まってからのことだった。美沙子は、二十四年の半生をしみじみと振り返りたい気分であった。

二週間後に、自分の人生は決まる。これまで、特別な夢も抱かなかったし、冒険もしなかった。父は勤続二十五年の公務員で、母は適当に厳しく適当に甘かった。三人姉妹の真ん中で、高校を卒業してすぐに三星食品に就職した。

平凡な娘時代だった。恋愛らしい恋愛も、したことはなかった。長谷川光彦と結ばれたのも、恋愛でというよりお互いに好感を感じての付き合いからだった。

それに、二号工場長の口ききもあったのだ。長谷川光彦も三十歳、そろそろ身を固めたらというわけである。二号工場長が、二人に結婚をすすめたのであった。双方に異存はなかったから、話はすぐ具体的にになったという結婚だった。

器量にしても、自分は大して美人ではないと思っていた。何とかいう女優に似ているとか、目が魅力的だとか言われたこともあったが、あまり関心はなかった。化粧も凝らない方だった。

平凡でいいのである。長谷川光彦と結婚すれば、平凡な人妻になるだろう。それでいいのだと、美沙

子は簡単に割り切っていた。平凡なら、容易に得られるものと思っていた。彼女は、平凡な生活を保つことこそ最も難しい、という点に気づいていなかったのである。

二週間後のことを考えていると時間の経過を忘れてしまい、いつの間にか、新宿についていた。新宿からの西武線は、ひどい混みようである。だが、それも美沙子は苦にならなかった。

結婚式と披露宴は、九段の『丹長園』でやることになっていた。すでに、お祝いの品物が大分集まってくる。三星食品の総務課員一同からは、客用座布団五枚一組を贈られていた。

美沙子は新宿から六つめの野方駅で下車した。野方駅から江古田四丁目の北の端までかなりあるがここを歩くのが習慣になっていた。いつもと微塵も変らない気持ちで、美沙子は歩を運んだ。

駅の附近は、いかにも郊外を走る私鉄の沿線という感じで、狭い道だが賑やかだし商店街の路上は明るかった。誰かが尾^つけて来る——と、そんな気がしたのは商店街を過ぎてからであった。

最初は、気のせいだと思った。しかし、誰かがあとを尾けて来るといふ気配は、依然として続いていた。一定の距離を置いて、音とまらない靴音が追つて来るのを、若い女の背中が敏感に感じとっていたのだ。

気味が悪くなった。男にあとを尾けられた経験は、今までにも何度かあった。最近では人家も殖えて郊外の住宅街らしくなったが、以前のこのあたりは寂しい土地柄であった。

春など霞がかつて、ところどころに残っている畠からは土の匂いが漂い、ここが東京の一部だろうかと首をひねりたくなるような田園風景だった。夜遅くなれば、女の一人歩きは怖かった。

痴漢にとつては、絶好の場所である。夜遅くなつてからの帰宅の途中、美沙子は駅前からあとを尾けられたり、酔っぱらいに追いかけられたりしたことがあった。

まだ高校生だった美沙子は不思議と気丈で、尾けて来た男を怒鳴りつけたこともあったし、酔っぱらいを突き飛ばして逃げたりしたものである。だが、

今夜の美沙子にそんな勇氣はなかった。

気持ちさが、すっかり萎縮してしまっている。恐しかった。悪い予感がして、背筋を悪寒が走った。

二週間後の結婚ということが、彼女の警戒心を強めるのかも知れない。自分を大切にしたいのだ。

沼袋町を抜けて江古田四丁目の南の端にさしかかった時、美沙子は十字路の一角に公衆電話のボックスがあるのに気づいた。身をひるがえして、美沙子は電話ボックスの中へ飛び込んだ。

窓ガラス越しに外を見る。あたりは、もうすっかり暗くなっていた。家路を急ぐ勤め人の姿が疎らに見えているだけで、車の往来も杜絶えていた。

今歩いて来た道の方をすかして眺めたが、怪しげな人影は見当らなかった。もつとも、視界が暗いということもあった。電話ボックスの中は明るい。だから、外はよく見定められないが、逆に電話ボックスの中の美沙子は外からまる見えということになる。

電話をかけると装おう必要があった。美沙子は、長谷川光彦に電話してみようと思いついた。誰かが

尾けて来るといふのは錯覚かも知れないし、何よりも彼の声を耳にすれば落着けるに違ひなかつた。

三星食品の二号工場へ直通の電話番号を回した。

残業は、まだ続けられていた。機械の音や人声を聞いて、美沙子はホツとした。自分が痴漢に尾けられるなどということは、あるはずがないと思つた。

「どうしたんだ」

と、間もなく長谷川光彦の声が電話に出た。

「何でもないんだけど……」

「じゃあ、電話切るからね。今、手が離せない仕事をしているんだ」

「すみません……」

美沙子は電話を切つて、ボックスから出るほかはなかつた。

電話ボックスから出て、美沙子はあたりを見回した。異常は認められない。道路に面している雨戸を締めきつた家からテレビの音声が微かに聞こえて来た。

気のせいだと自分に言い聞かせて、美沙子は再び歩き出した。まだ七時前である。どこの家でも夕食

時なのだ。それで、戸外は閑散としているのだろう。変質者が出沒する時間ではない。

小学校の脇へ出ると、あとは一直線に続いている道だつた。一本道を真直ぐ行けば突き当たりは練馬区である。練馬区との境に、美沙子の家はあつた。

しかし、この道は練馬区に近くなるほど暗く寂しくなる。ポツンと立っている街灯が、空地の小さな畠を照らし出していた。人家は長い塀に囲まれて、庭の広そうな邸宅ばかりになる。

通い馴れている道だつた。これまで痴漢や変質者の脅威など一度も感じたことがなかつた。なぜ、今夜に限つて怯えなければならぬのか、美沙子は不思議だつた。また、それだけに誰かが尾けて来るといふのが事実であるような気がするのだ。

迫つて来る危険を、自分は本能的に嗅ぎ取つているのかも知れないと、美沙子は思った。歌を口ずさんでみた。だが、美沙子はすぐ声を呑み込んでしまった。今度こそ、はつきりと背後に近づいて来る足音を聞いたのである。運動靴が軽く地面を叩き、砂利を踏む音であつた。

後ろを振り向こうにも、肩が固定してしまつて首が回らなかった。駆け出そうと思つたが、それもできなかつた。駆け出したとたん、後ろから飛びつかれそうな気がするのである。

違う、ただの通行人だと美沙子は胸のうちで叫んでいた。自分が、そんな恐しい目に合うはずはない。二週間後に結婚式を控えている娘が、変質者に襲われる——それは、映画か小説のストーリーではないか。

左側が、妙千寺という小さな寺の石塀になった。右手には、松林が続いている。正面に灯が点在していた。あと家まで三百メートルないと思ひながら、美沙子はここが最も危険な場所だということに気づいていた。

不意に、黒い影が美沙子の傍らをすり抜けた。美沙子は喉を鳴らして息を詰まらせた。前に回つた人影は、足をとめてから向きなおつた。同時に、美沙子は肩のあたりを激しく突かれていた。

腰が砕けた。ヒールが高かつたせいもある。美沙子は、右の方へよろけた。とたんに、彼女は尻餅を

つくように道路より一段低くなっている松林の中へ倒れ込んでいた。

「立てよ」

あとを追つて来た男が、低い声で言った。

「お金なら……上げます」

美沙子は夢中で、バッグを差し出した。だが、男はバッグに目をくれようとしなかつた。

「お願い、助けて……」

美沙子は、機械人形のように幾度も頭を下げた。ここからは動きたくはなかつた。ここなら、道路から二メートルと離れていない。誰かが道を通れば、すぐ脇の情景に必ず気づくだろう。

「立つんだよ」

男は、美沙子の腕を掴んだ。反射的に、身を固くしたが、男の力は強かつた。美沙子は簡単に、引き起こされてしまった。抵抗はできなかった。四肢の神経が、まったく麻痺してしまつたようである。

「歩け」

「助けて。ね、お金を上げますから……」

「金は、あとでもらうよ。さあ、歩けよ。ポケット

に、おっかないものが入っているんだぜ」

美沙子は沈黙した。ポケットに何を持っているか分からない。相手の男は、白い布地のジャンパーを着ていてまだ若い。下手に逆らうと、どんな恐いこともやりかねない。

美沙子は、松林の奥へ向かって歩き出した。一步一步、絞首台へ近づいて行くような気持ちだった。足が、地面に吸い込まれるように感じた。

通行人の気配はまるでない。靴音さえも聞こえなかった。大分、松林の奥まで来たようだった。目で確かめなくても、もう道路から見えないところまで来ているということが分かった。

闇が濃くなった。頭上で、松の梢が騒いでいる。松風などという風流なものではなかった。風が松の梢を鳴らして、冷やかに笑っているという気がした。

ふと、目の前の闇に人間の輪郭が浮かび上がった。人がいた、と美沙子は思わず救いを求める言葉を口走りそうになった。しかし、一瞬の後に美沙子は逆に深い絶望の淵に落ち込んでいた。

「連れて来たぞ」

と、背後の男が闇の中の輪郭に声をかけたのである。

考えてみれば、今頃こんなところに用もない人間が来ているはずはなかった。仲間だったのだ。二人組となれば、もう逃げられる可能性はゼロに等しかった。

待っていた方の男は、黒いズボンに春もののセーターという服装だった。白ジャンパーとは違ってその辺のチンピラという感じではなかった。背は高いが、まだ少年のような顔立ちをしている。

どこかで見たような顔だった。毎朝、同じ電車に乗り合わせている学生のような気がした。しかし今の美沙子に相手の顔を思い出せるほどの余裕はなかった。

「結婚……するんだって？」

セーターの男が、かすれた声でいった。夜目にも白い顔だった。陰気な感じで、目が精神異常者のそれのように異様に光っている。唇が痙攣するように震えていた。

桜の花弁が散っている。菜の花畠が、黄色い絨氈を広げたようだった。オルガンの音が流れて来る小生たち合唱していた広い校庭が、春の日射しの中で底抜けに明るく見えている。

一家が揃って、食卓を囲んでいる。父は一本だけの晩酌が心から楽しそうだった。母は笑い上戸で相変らず歯を覗かせていた。姉の静江は、むつつりとしている。妹の可津美は冗談を飛ばして、母を笑わせていた。

三星食品の職場では、同僚たちが雑談を交わしている。長谷川光彦もいた。彼は誰かをからかっているようである。女に追われて、逃げて行った。

こうした意味もない回想が、美沙子の頭の中を去来する。もう何か言う元気も失っていた。誰もがいつに変わぬ平和な時間を過ごしている。自分だけが、どうにもならないような立場に追いつめられたという気がした。

「おれを知っているかい？」

セーターの男が言った。美沙子は、力なく首を振った。相手が誰であるか、その名前を確かめたところ

ろで仕方のないことだった。これから、彼らは何をしようとするのか、分かりきっている。長谷川光彦との結婚がご破算になるような結果が出るだろう。

三星食品も、辞めなければならぬ。家の中に引きこもって、希望のない毎日を過ごすことになるだろう。問題はそういう結果であって、相手の男がこの誰かではなかった。

「おれ、ずっと前からあんたが好きだったんだ。あんたのことを考えていると、夜も眠れないくらいだった。今度、あんたが結婚するっていう噂を聞いて、もう我慢できなくなったんだ」

と、陰気な声は続いた。

「だから……」

美沙子は腑抜けのように、あらぬ一点へ目を向けて、言葉をこぼした。どうにでもなれという気持ちだった。

「一度だけでいい。あんたの身体が欲しいんだ。何なら、その責任をとってもいいんだよ。おとなしく、おれのものになってくれ」

「さわりでもしたら、舌を噛み切って死んでやるか

ら……」

「荒っぽいことは、したくないんだ」

セーターの男は、哀願するように上体を低くした。それを、白ジャンパーの男が不意に押しつけるようにして言った。

「おい、約束が違うぞ。おれが先で、その上持ち金をもらうっていう話だったろう」

「金はあるが、もらって行けよ。だけど、順番はおれが先だ」

セーターの男が、鋭くやり返した。彼らの争いを、美沙子は逃げるチャンスと見た。

「そんなことを、言えた義理か！」

「この女は、おれのものだ」

「お前が、何をしたっていうんだ。ただ、ここで待っていただけだろう。おれが、連れて来たんだ」

「そっちは、金が目的だったんだろう。もう礼は渡してあるし、バッグも持って行けばいいじゃないか」

男たちは、やり合っている。彼らは、狂っているのだ。美沙子の身体で欲望を遂げることに、すべてを賭けているようだった。

セーターの男はこの付近の家に下宿でもしている学生で、以前から美沙子を淫らな欲望の対象として見ていたのだ。そして、美沙子が近く結婚するとう噂を耳にした。

彼は、知り合いのチンピラに助勢を頼んだのだらう。礼金を出すから、美沙子をこの松林の奥へ連れ込んでくれという取引きだったのに違いない。

ジャンパーの男は礼金を受取り更に美沙子のバッグの中身をもらうということで、協力を承諾した。しかし、いざこの場になると彼もまた、女への欲望を抑えきれなくなったのだ。彼が今まで知らなかった新鮮な魅力を、美沙子に感じたのかも知れない。

美沙子は、松の太い幹から背を離した。爪先で地上を探るようにしながら、身体を移動させる。次の瞬間、彼女は道路の方向へ脱兎の如く走り出していた。

しかし、逃げることは所詮、不可能だったのである。五メートルと走らないうちに、男たちの声を背後で聞いて、ほとんど同時に肩へ手をかけられていた。

美沙子は、激しく抵抗した。四肢をバタつかせてもがいた。だがあまり効果はなかった。後ろから抱きかかえられているのだ。男の両手が、美沙子の胸の隆起を押えていた。

美沙子は、地面に引き倒された。上からセーターの男が馬乗りになった。ギラギラしている目と、獣に似た荒々しい息使いが彼女の顔に迫って来る。

男の手が、スカートにかかった。美沙子はもう夢中だった。目だけは固く閉じて、強引に上体を起こそうとした。彼女の右手が、男の背中へ回された。指先に冷たいものが触れた。それが何であるかも確かめずに握り締めて、美沙子は腕に力を込めた。

男がうめき声を洩らした。不意に下半身を圧していた重量感が消えたことに、美沙子は気づいた。男の身体が斜めに傾いて、そのままゆっくりと地上に転がった。

「人殺し」

傍らに棒立ちになっていたジャンパーの男が、そう叫んだ。美沙子はふと、自分の右手に目をやった。彼女の右手は、果物ナイフを固く握り締めていた。

そして、生温かい液体が二の腕にかけて流れ落ちていたのである。

耳が痛くなるような静寂の時間が流れた。松の梢も、鳴りをひそめたようであった。地球そのものが静止したように、美沙子は感じた。闇の中に、空気の流動はなかった。

「おれは、知らねえぞ！」

カサカサした声で、それも震えながらジャンパーの男が小さく叫んだ。思わぬ事態の急変に、男は脅えきっているようだった。男はあとずさりながら、幾度か尻餅をつきそうによろけた。

闇の中を、白いものが走った。男が身を翻して、駆け出したのである。気も動揺したというその後ろ姿は、すぐ闇に消えた。美沙子だけが、とり残された。

珍しいものでも覗き込むように美沙子は倒れている男に目を近づけた。男は背を丸めるようにして地上に横たわっていた。動かない。すでに呼吸が止絶えていて、その顔には明らかに死相があった。

死んだ——と、美沙子は自分の右手へ目を移し